

# 吃りに就いて

是はドクトルクノッブ氏の記述を近刊の衛生雜誌にエムケー氏の抄譯されたものであるが幼児教育者に採りて必要なる心得であらうと思ふので此に載せて讀者の注意を乞ふ次第である。殊に昨秋態々吃音矯正に關する質問を寄せられる方は尙更に注意して讀まれんことを切望するものである。

吃りの小兒は甚だ多くわつて、獨逸國のみにても約十萬の學童は、吃りに罹つて居る、それで此吃りの兒童や兩親が、切に之れを治さうと焦慮する所から、非醫者の手に掛けて、治療を計つて居る有様である、今日でも、言語障礙に罹つて居る者を治療するのは、醫者の仕事では無くて、教育家の成すべき事である、即ち教育的治療に委すべきものであると言ふ醫者も無いことは無い、然るにヘルマン、グッツマンの近世學派の言ふ所に依る

と言語障礙に罹つて居る者を治療するのは、此專門教育を受けた醫者に行はしむべき事である、或は、少く共、斯くの如き資格ある醫者の監督の下に於て、吃音矯正法を専攻した教師に委すべきものであると論じて居る、考へて見るに、一體言語障礙といふものは、身體の異常に基くものであつて、彼の官能性の言語障礙も亦同じく身體の變状に伴ふ事が多いといふ事を會得すると、どうして、此吃音の矯正は、醫者の治療に委ねなければならぬといふ要求は、正當であると思はれる、更に茲に、例を引いて來て、説明すると上部氣道の變状殊に鼻呼吸が妨げられた場合杯は此吃りの原因の上から言ふも、又治療の點から言ふも、大層重要な意味のある事柄なのである、それから又肺臟の働きか何かの原因で、妨げられた場合にも發語作用は、大變に、障礙せられるものである、それから便秘といふ事も、吃音を治す上に於て大層妨げになるものであるといふ事も、日常經驗する所であつて、一向耳新らしい事柄でも無い、何故に便秘すると言語の上に障礙を及ぼすかと聞く

のに、それは、便秘すると横隔膜（胸腔と腹腔とを界して居る所の筋肉から出来て居る丈夫な膜で此上に肺と心臓があつて、下には、肝臓、胃杯がある）の運動が妨げられるからである、それから吃りに罹つて居るものに、心理療法を施すと、甚だ有效な事がある、此點に於ては、吃りを治療する醫者は、教育者といふよりも、ムシロ實地心理學者であるかのやうに思はれる、此理を少しく説明して見ると次の如くである、醫者は、其職掌として、考へ方が、客觀的である、即ち患者をヨク觀察する事をする、決して自己の考へを患者に當て嵌めぬ、虚心平氣で患者の狀況を見る、之れに反して、教育者といふものは主觀的に考へるから、己れの考へた事や、感覺した事を其儘兒童に當て嵌めんと勉める、即ち醫者が心理的療法をやつて、效を奏する所から、教育者といふよりも、ムシロ實地心理學者と謂つて良いといふのは、此理由があるからである、決して、醫者が、教師よりもエライ利巧なと言ふ譯ではないのである、以上の譯であるからして、醫者と教師とが共同して

言語障礙のある兒童を治療するといふ事には、養成が出來ぬ、餘談は別として、さて、吃りの豫防を矯正する事を述べるには、先づ順序として、吃りとは一體如何なるものであるのか、又如何にして、發生して來るものであるか、又其治療杯言ふ事柄に就て述べて置く必要がある、そこで此吃りといふものは、醫學の言葉で、而かもクスマウルといふ學者の説を借りて言うて見ると、調節神經の病であると言へる、吃者は、發言する時に、其傍に誰も居らぬ、誰れも見たり聴いたりする者が居らぬと考へて居る時杯には、何の障りも無しに發言する事が出來るのである、然るに、茲に自分分は、思ふやうに自由に發言する事が出來難いといふ事を自覺したり、其觀念が起つたり杯すると直に呼吸筋、發聲筋、調節筋杯に、痙攣が起つて來て、吃るのである、即ち、言語機關の調節作用といふものは、驚くべき複雑なものであるが、此複雑な機關の働きが、神經の中樞から不良の影響を蒙つて、言語を發する働きがウマク行はれぬ所からして、吃るのである、其他身體の色々な機

關にも此吃りに似た現象がある、例へば、不慣れ  
 な場所に出ると、面喰らつて、手足の隨意筋が、  
 其調節運動を失ふ事がある、其結果躓いたり、  
 手に持つて居るべき帽子やステツキ杯を落したり  
 杯する事があるのは、此類に屬する、それから泌  
 尿管は、全く健全であるにも拘らず、膀胱に尿が  
 一杯充ちて居るのに、少しく排尿をする事の出来  
 ない事がある、是れは、例へば、他人が見て居る  
 といふ考への起つた時杯に起る事柄である、斯う  
 言ふ類の障礙は、矢張り一種の吃りと云ふ事が出  
 來るのである。  
 吃りの原因を述べて見ると、吃りに罹る人は、  
 神經病の素因を以て居る人に多い、又急性傳染病  
 が動機となつて、吃りを發する事も決して稀では  
 無い、其傳染病の中で、殊に擧ぐべきものは「ヂ  
 フテリア」麻疹、猩紅熱、「チフス」、流行性感胃  
 等であつて、其外に外傷も此れに屬する、それか  
 ら、吃りの眞似をして居ると、遂には、自身も吃  
 りになつて了ふ事がある、此れを精神傳染と唱へ  
 て居る、書物を調べて見ると、此種のもは、珍

しくは無いが、予の實驗した一人の吃者は、始め  
 て芝居に行つた日から、吃り始めた、その他遺傳  
 性吃りと言はれて居るものは、多くは、遺傳素質  
 のある上に眞似をする所から來たものである、此  
 種のもは、治療を施しても、思ふ様に成績が擧  
 げられぬ、近頃予は、或る園丁の娘の子が吃りになつ  
 たのを治療した事があるが、效能が顯はれて、全  
 く治つて了つた、然るに、二三ヶ月の後に、又々  
 再發して、吃り始めた、そこで、予は、他の吃る  
 小兒と一緒に遊んで居たのでは無いかと聞いた所  
 が、母の答へて言ふには、父が少しばかり吃りま  
 すと言つた、そこで、又此子に治療を施して、比  
 較的早く治して了つた、然るに、二三ヶ月経つた  
 ら、又々吃り始めた、それで、今度は、父親が其  
 子を予の所に連れて來た、で其父親の言葉を聞いて  
 て、予は、直に、此父は、非常に躁急の性質の人  
 で吃りである事を知り抜いた、父親は、予の療法  
 に至極不満足で、行き届かぬから、此のやうに再  
 發するのであると小言を言つた、そこで、予は、  
 此父に向つて言ふには、手本を示して居る間は、

此子の吃りは、永久に治癒する事は無いと言ひ聞かせた、そうした所が、件の父は、甚しく吃りながら、何を言ふのかと訪問したが、其後絶へて予の所を訪問しなくなつた。

吃りの多くは、言語の發達する時期に起るもので、約三歳乃至五歳の時に發して來る、併し此の年齢の小兒は通常少しは吃るものである、即ち生理的の吃りと謂うて差支は無い、兒童の精神發育と、言葉を理解する精神力と、それから自己の考へた事を言葉に顯はさうとする能力が、複雑な發語運動を營む身體能力に先だつた場合には、子供の言葉は茲に吃るのである、グーツマンが言つた如く、子供は、多少に拘らず、烈しく吃るものである、もしも子供が、甚しき神經病の素因を以て居らぬ時、且つ其周圍が靜かであつて、神經衰弱症の人が居ない時には、イクラか吃りは容易に矯正せられるものである、母親や教師杯が、ひどく吃りの小兒に同情したり、憐れむたり、或は、餘りに烈しく嚴格の態度を採つたり杯すると、吃りは、一向に治らぬものである。

それから六歳と八歳の間頃のの小兒に、吃りを發する事が中々に多い、此場合には、學校授業を受けながら爲めに、精神に強い感動を蒙つたのと又第二生齒期に受ける身體的影響との爲めに、吃りを發するのである。

それから多くの統計に徴するに、十四歳頃になつて吃りが多くなるといふのも事實である、丁度發情期の頃である、一體に吃りの兒童の三分の一は、就學の時に吃りに罹つたもので、三分の二は、吃りの儘で學校を卒業したもので、此れは、就學して居る間に吃りに罹つたものである、成年期に達してから吃りに罹るといふ事は、大抵無い事で、若しあればそれは例外である。

そこで吃りの療法には古來種々の方法があるが、一番良いのは、グーツマンといふ人の方法である、是れはドーするの如いかに、呼吸、發聲、調節の常規運動は如何なるものであるかを例を以て兒童に示すのである、是れは、勿論兒童の精神發達の程度に應じてやるのである、そうして常規運動を教へながら、發語運動の妨げられる狀況を示し

此障礙を矯正する方法を教へるのである、此時兒童の意志の力と叡智と之れから醫者の熱心と質地心理學者たる能力とが甚だ大切なものである、吃りを治す積りで暗示を試みた人も多くある、此方法も危険は無いが、併し永く此方法を續けても、永久の効果は中々に擧らぬものである。

吃りの原因は、上に述べた通りである、是れは、豫防を講ずる上に甚だ大切で、又原因が分つて居れば豫防法は、自ら分つて來る理屈である。

兒童の神經病的素因は、哺乳期或は出産前から出來る限り之れを除く事を勉めなくてはならぬ、併し此れは甚だむづかしい事である、父親が憂鬱症であつたり、母が「ヒステリー」であつたりする時は、小兒は、其發育の上にななる感化を蒙むるのである、吃りの場合にも亦左様である、此時兩親が小兒と分れて他の所に住して居れば、小兒の吃りを治すに大層都合が宜しいけれども、此事を兩親に納得させる事は容易な事では無い、それで神經病の素因を以て居る小兒で、而かも吃りを始めかけて居るものを精神の健全な人ばかり居る所

に移すのは、吃りの治療上唯一の方法であつて、同時に治療する上に於て安全な道である、もし此れも行はれぬとならば、醫者は、心理的、理學的藥物的の諸療法を試みるのである。

吃りの初期には、醫者たるものは、宜しく兒童の身體の狀況に眼を向けなければならぬ、例へば、呼吸運動を妨げるやうな事柄は、一切除く事を勉める、是れには、先づ、胸廓の疾病（佝僂病、肋骨、脊髓カリエス）、肺炎、肋膜炎の残りを除く事をやる、それから、腸の中に瓦斯が溜つたり、或は、便秘して居るならば、是れを除く事をするその外腹部の病で、横隔膜の運動を妨げるやうなものをも、除く事をする、又小兒には稀であるけれども、氣管、喉頭の病の外に、咽頭や鼻の異状は、甚だ屢々あるものであるから、注意しなければならぬ、又咽頭口蓋の線が腫れ上つて居る事も、吃りの原因上中々緊要なものであるから、此腫れた腺を切り取るといふ事は、吃りの豫防上甚だ大切な事である、それから又鼻呼吸を妨げるもの、例へば、鼻中隔の曲つて居るのや異物や或は鼻茸杯

を去る事をするのも豫防上同じく大切である、又齒の生え方の悪いのも注意すべきものである、幼稚な小兒や生長した小兒に見る不道德の悪習慣も矯正しなければならぬ、それから急性傳染病の恢復期も注意しなければならぬ。

吃りの眞似をすると、小兒は、容易に吃るやうになるものであるから、媪母、子守り等のもので吃るものがあつたら、小兒の周圍から、他に去らせる事をしなければならぬ、是れは、羅馬のクインチリアンも言つた事である、又吃りの兒童は、それが全治する迄は、學校に出さぬ方がよい、吃りに限らず、舞踏病に罹つて居る小兒も、登校を禁じた方がよい、他の生徒が眞似をして、その爲めに、本病に罹る事であるからである、或人は、吃りの小兒を集めて、特殊の學級を編成して、教育した方が宜しいといふ人もある、此場合には、吃りの矯正を知つて居る教師が教育の任に當るのがよい、併しながら、實際是れが出来るかどうか疑はしく思はれる、予の考へる所では、師範學校なり、大學なりで、教師に、言語の生理と其療法と

を教へて置いたなら、授業の時に吃りを矯正するに都合が良からうと思はれる。

吃りは、時としては、發情期に入つてから、或は、發情期以後になると、自然に治る事がある、併し是れは稀である。

●英國の家庭 一家仁讓なれば一國仁讓に興ると聖人の遺書にもある如く、一國の富強は必ず一家に求めざるべからず、英國に於ける或貴族の家庭談といふを聞くに、其家族は主人、夫人、令息令嬢並に數名の婢僕とであるが、實に和氣藹々たるものにて誠に羨ましく感ぜられた、一日間の模様をいつて見れば、先づ朝起ると一同食堂に集り、モウ湧くが如き談笑である、高貴の家庭にも拘らず、食卓に食物は一切自分で運び取る事になつて居る、こゝが大に日本なぞと違ふ、日本であれば召使をコキ使ふ處だ、朝食がすむと、各自の室に引取つて令息でも令嬢でも一人としてノラクラ遊ぶ様な事はなく、皆それれ、必ず一日の用務に取り掛るのである。晚餐の時には必ず附近の住居人數名を招き且つ談じ且食ふ、此談話が意外の利益を興へるものだ、常に一家の内が楽しいのは、英國が富強になつた基であると思ふ、一體日本ならば殊更に主人でも夫人でも、四角張つて六ヶ敷い顔をするものを、英國では温顔微笑の裡に生活して居る。